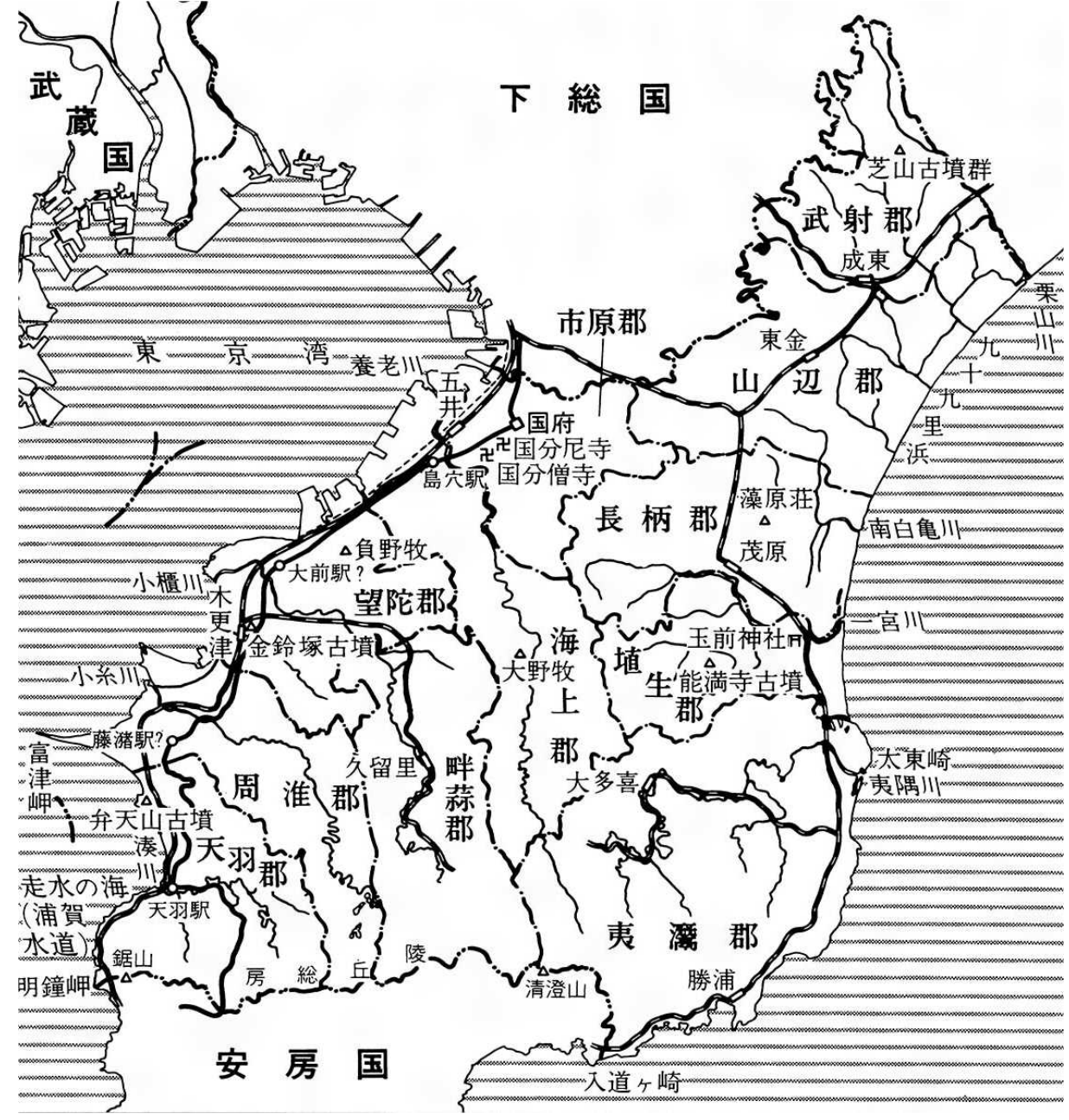


上総国・相模国・武蔵国・信濃国の歌

北川 和秀

◎上総（今の千葉県南部）



【周准】（君津市、富津市）

上総の周准の珠名娘子を詠む一首 短歌を并せたり

①しなが鳥 安房に継ぎたる 梓弓 周准の珠名は 胸別の 広き吾妹 腰細の すがる
娘子の その姿の 端正しきに 花の如 咲みて立てれば 玉梓の 道往く人は 己が

行く 道は行かずて 召ばなくに 門に至りぬ さし並ぶ 隣の君は あらかじめ 己
妻離れて 乞はなくに 鍵さへ奉る 人皆の かく迷へれば うちしなひ 寄りてそ妹
は たはれてありける (九・一七三八)

反歌

② 金門にし人の来立てば夜中にも身はたな知らず出でてそ逢ひける (一七三九)

【東歌】

③ 馬來田の嶺ろの篠葉の露霜の濡れてわ来なば汝は恋ふばそも (一四・三三八二)

【防人歌】

④ 家にして恋ひつつあらずは汝が佩ける大刀になりても齋ひてしかも (二〇・四三四七)

右の一首は、 国造 丁下部使主三申が父の歌なり。

⑤ たらちねの母を別れてまことわれ旅の仮廬に安く寝むかも (四三四八)

右の一首は、 国造丁下部使主三申のなり。

⑥ 百限の道は来にしをまた更に八十島過ぎて別れか行かむ (四三四九)

右の一首は、 助丁刑部直三野のなり。

⑦ 旅衣八重着重ねて寝ぬれどもなほ膚寒し妹にしあらねば (四三五一)

右の一首は、 望陀郡の上丁玉作部国忍のなり。

⑧ 道の辺の荊の末に這ほ豆のからまる君を別れか行かむ (四三五二)

右の一首は、 天羽郡の上丁丈部鳥のなり。

⑨ 家風は日に日に吹けど吾妹子が家言持ちて来る人もなし (四三五三)

右の一首は、 朝夷郡の上丁丸子連大歳のなり。

⑩ わが母の袖持ち撫でてわが故に泣きし心を忘らえぬかも (四三五六)

右の一首は、 山辺郡の上丁物部平刀良のなり。

⑪ 蘆垣の隈処に立ちて吾妹子が袖もしほほに泣きしそ思はゆ (四三五七)

右の一首は、 市原郡の上丁刑部直千国のなり。

⑫ 大君の命かしこみ出で来れば吾ぬ取り著きて言ひし子なはも (四三五八)

右の一首は、 種准郡の上丁物部龍のなり。

二月九日に、上総国の防人部領使少目從七位下茨田連沙弥麻呂が、進れる歌の数は十九首なり。但し拙劣なる歌のみは取り載せず。

◎相模（今の神奈川県）

【足柄・箱根】

造筑紫観世音寺别当沙弥満誓の歌一首

①鳥総立て足柄山に船木伐り樹に伐り行きつあたらし船材を（三・三九一）

②足柄の箱根飛び越え行く鶴のともしき見れば倭し思ほゆ（七・一一七五）

③足柄のみ坂たまはり顧みず吾は越え行く荒し男も立しや憚る不破の関

越えて吾は行く馬の蹄筑紫の崎に留り居て吾は齋はむ諸は幸くと申す

帰り来までに（二〇・四三七二）

右の一首は、倭文部可良麻呂のなり。

④足柄の御坂に立して袖振らば家なる妹は清に見もかも（四四二二三）

右の一首は、埼玉郡の上丁藤原部等母麻呂のなり。

⑤色深く背なが衣は染めましを御坂たばらばま清かに見む（四四二四）

右の一首は、妻物部刀自売のなり。

【相模嶺】（大山）

○相模嶺の小峯見かくし忘れ来る妹が名呼びて吾を哭し泣くな（一四・三三六二）

或る本の歌に曰はく、武蔵嶺の小峯見かくし忘れ行く君が名かけて吾を哭し泣くる

◎武蔵（今の東京都・埼玉県と神奈川県の一部）

【武蔵野】

○武蔵野の草は諸向きかもかくも君がまにまに吾は寄りにしを（一四・三三七七）

【多摩川】

○多摩川に曝す手作さらさら何そこの児のここだ愛しき（三三七三）

【多摩の横山】（多摩丘陵）

○赤駒を山野に放し捕りかにて多摩の横山徒歩ゆか遣らむ（二〇・四四一七）

右の一首は、豊島郡の上丁棕椅部荒虫が妻宇遅部黒女のなり。

【大家が原】（埼玉県入間郡越生町大谷、あるいは入間郡日高町大谷沢）

○入間路の大家が原のいはる蔓引かばぬるぬる吾にな絶えそね（一四・三三七八）

【埼玉の津】（熊谷市・行田市）

○埼玉の津に居る船の風を疾み綱は絶ゆとも言な絶えそね（一四・三三八〇）

◎信濃（今の長野県）

【東歌】

①信濃なる須賀の荒野にほととぎす鳴く声聞けば時すぎにけり（一四・三三五二）

②人皆の言は絶ゆとも埴科の石井の手児が言な絶えそね（三三九八）

③信濃道は今の壘道刈株に足踏ましなむ履着わが背（三三九九）

④信濃なる筑摩の川の細石も君し踏みてば玉と拾はむ（三四〇〇）

【防人歌】

①韓衣裾に取りつき泣く子らを置きてそ来ぬや母なしにして（二〇・四四〇一）

右の一首は、国造小泉郡の他田舎人大島のなり。

②ちはやぶる神の御坂に幣奉り齋ふ命は母父が為（四四〇二）

右の一首は、主帳埴科郡の神人部子忍男のなり。

③大君の命かしこみ青雲のとの引く山を越よて来ぬかむ（四四〇三）

右の一首は、小長谷部笠麻呂のなり。

二月二十二日に、信濃国の防人部領使、上道して病を得て来らずして、進れる歌の数は十二首なり。但し拙劣なる歌のみは取り載せず。